

渡良瀬遊水地湿地保全・再生モニタリング委員会ニュースレター

第15回渡良瀬遊水地湿地保全・再生モニタリング委員会を開催しました

平成29年10月30日（月）13:00～15:00に、栃木県栃木市の藤岡遊水地会館において「第15回渡良瀬遊水地湿地・保全再生モニタリング委員会」を開催しました。

◆モニタリング委員会の概要

今回は委員7名にご出席いただきました。

【委員参加者名簿】（五十音順・敬称略）

（学識者・NPOなど）（五十音順・敬称略）

青木 章彦	作新学院大学女子短期大学部 教授
大和田 真澄	渡良瀬遊水地植物の会 世話人
栗原 隆	栃木県立博物館 主任研究員
佐藤 邦明	埼玉大学 名誉教授
清水 義彦	群馬大学大学院 教授
関口 明	渡良瀬遊水地野鳥観察会 副会長
高松 健比古	渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会 代表世話人

当日は、委員会の前に委員とともに、掘削地の現状を視察しました。

委員会では、事務局から本年度のモニタリング結果（中間報告）を報告するとともに、市民団体より活動状況について説明いただきました。委員からは、調査やとりまとめに関する今後の進め方、創出する池のあり方などについてご意見やご助言を頂きました。



現地視察の様子



委員会の様子

○報告内容と主なご意見

<モニタリング結果（中間報告）について>

第2調節池周辺や現況を保全する範囲のモニタリング結果を示すとともに、掘削地における植生や水位の調査結果について報告しました。ポイントは以下の通りです。

- 平成19年以降、第2調節池周辺や現況を保全する範囲における表層地下水位に大きな変化は見られていない。
- 本年度の調査対象である掘削地は完成して1年目であるため、一部に裸地が見られるもののヨシ原の再生やシードバンクから多くの植物重要種が再生している状況が確認された。
- スゲ原再生調査区^{注1}では、採取深度が浅い表土を導入した区画の方が、スゲ類の植被率が高い傾向が見られ、浅い部分の表土ほどスゲの種子や根系が多く含まれる可能性が示唆された。

注1) スゲ類の優占する草地の表土を撒きだし、スゲ原の再生状況を調査している。

◎主なご意見

- 昆虫類調査については、毎年、同じ場所で同じ質の調査を実施しなければ、経年比較ができない。
- 鳥類の繁殖期（3～7月）に水面が小さくなることは悪影響だが、水面が下がって干潟状の陸地が出てくると、それを目当てに飛来する鳥類もいる。一概に池の水位が下がることが悪いとは言えない。
- 昆虫は多様で、いろいろな水環境に適應しているので池との関係については一言では言えないが、魚や鳥が多いことで昆虫の生息が抑制されると考えられる。いろいろなパターンの池があることが重要である。
- 湿地再生手法の検討のためには、水収支の把握が重要である。池の水位データを使って水収支の予測ができるので考え方を提案したい。
- スゲ原再生調査区では、スゲ類以外の植物が多く確認されているようだが、次回の委員会で種構成について示してほしい。特につる植物が、最初に入ってくると、スゲ原の再生がうまくいかない可能性もあるので注意してほしい。
- 湿性裸地を創出するには表土の撒き出しはうまくいかないと懸念される意見もある。全ての箇所を表土撒き出しするのではなく、天地返しや放置して観察するなどの工夫も必要ではないか。
- 現在の掘削地の名前は長く、覚えにくいいため、地元が親しみやすい名前を公募することなどを考えていきたい。

<市民団体からの活動報告について>

3団体（わたらせ未来基金、渡良瀬遊水地野鳥観察会および渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会）から、本年度の活動内容について説明いただきました。概要は以下の通りです。

- 外来植物の駆除作戦により、絶滅危惧種を含めて、様々な湿地性植物が復活している。植生管理は、どのように手を加えるのか考えながら順応的に関わっていく必要がある。
- H27.9の台風の後、池内に魚が流入し、水生昆虫が激減した。また、一時的にザリガニが増えた事で見られなくなった水生植物がある。「水生昆虫と魚類の関係」や「水生生物と水生動物の関係」について定期的なモニタリングが必要。

- 第二調節池やその周辺でコウノトリが飛来し、カエル類、ドジョウ、貝類、昆虫類などの採餌行動が確認された。
- 希少昆虫のワタラセハンミョウモドキが掘削値の一部で見られるようになった。ヤナギの除去やヨシ焼きによるヤナギの減少で、生息地が増えると思われる。